

# 荒神山古墳群および石切場の測量 成果報告

榎木規秀／仲田周平／岡山仁美／西澤光希

草津市教育委員会／豊岡市教育委員会／滋賀県立大学人間文化学研究所 M1／滋賀県立大学人間文化学研究所 M1

## 1. はじめに

滋賀県立大学考古学研究室は、2011年より断続的に彦根市荒神山周辺(図1)をフィールドとして分布・測量・実測調査を実施してきた。今回は、2016年に実施した荒神山古墳群C号墳、石流南支群、石切場に関する測量・実測調査の成果について報告する。(岡山)

## 2. 荒神山古墳群C号墳の調査

### (1)調査の目的など

C号墳は山頂の荒神山神社と山裾の遥拝殿を結ぶ参道の北側、標高150m付近の谷部に位置する。この古墳は、2012年に横穴式石室の実測調査を行った結果、玄室長は不明であるが幅は3m近くになることが明らかとなった(仲田・大西2012)。この玄室幅は、湖東平野では赤坂古墳や大岡高塚古墳など最大級の石室に匹敵するものであることから、大型石室となることが予想される。このため、古墳の立地した地形や墳丘規模を明らかにするために、測量調査を実施した。(仲田)

### (2)C号墳の測量成果(図2)

C号墳の周辺は急峻な斜面で土砂の流出が著しい。古墳の西側は砂防ダムが建設されており、東側は土砂崩れによって大きく削られている。また、石室石材の抜き取りや祠の建設により、改変が加えられている。

しかしながら、石室の西側で標高154mから156mにかけては地形がやや平坦になり、その西側ではわずかに円弧を描くような形で凹状の地形がみられる。これらは、それぞれ墳丘・周溝の一部である可能性が考えられる。横穴式石室を持つ古墳では、石室を中心に左右対称に墳丘が造られる。C号墳では、残存する西側の周溝から石室までの距離は約12mを測ることから、墳径は24m程度に復元できる。

ただし、土砂の流出や人為的な改変によって、墳丘や周溝と想定した部分は形がいびつなものとなっている。このため、実際の墳丘規模は大きく前後する可能性が考えられる。(仲田)

## 3. 石流南支群墳丘測量、石室実測調査報告

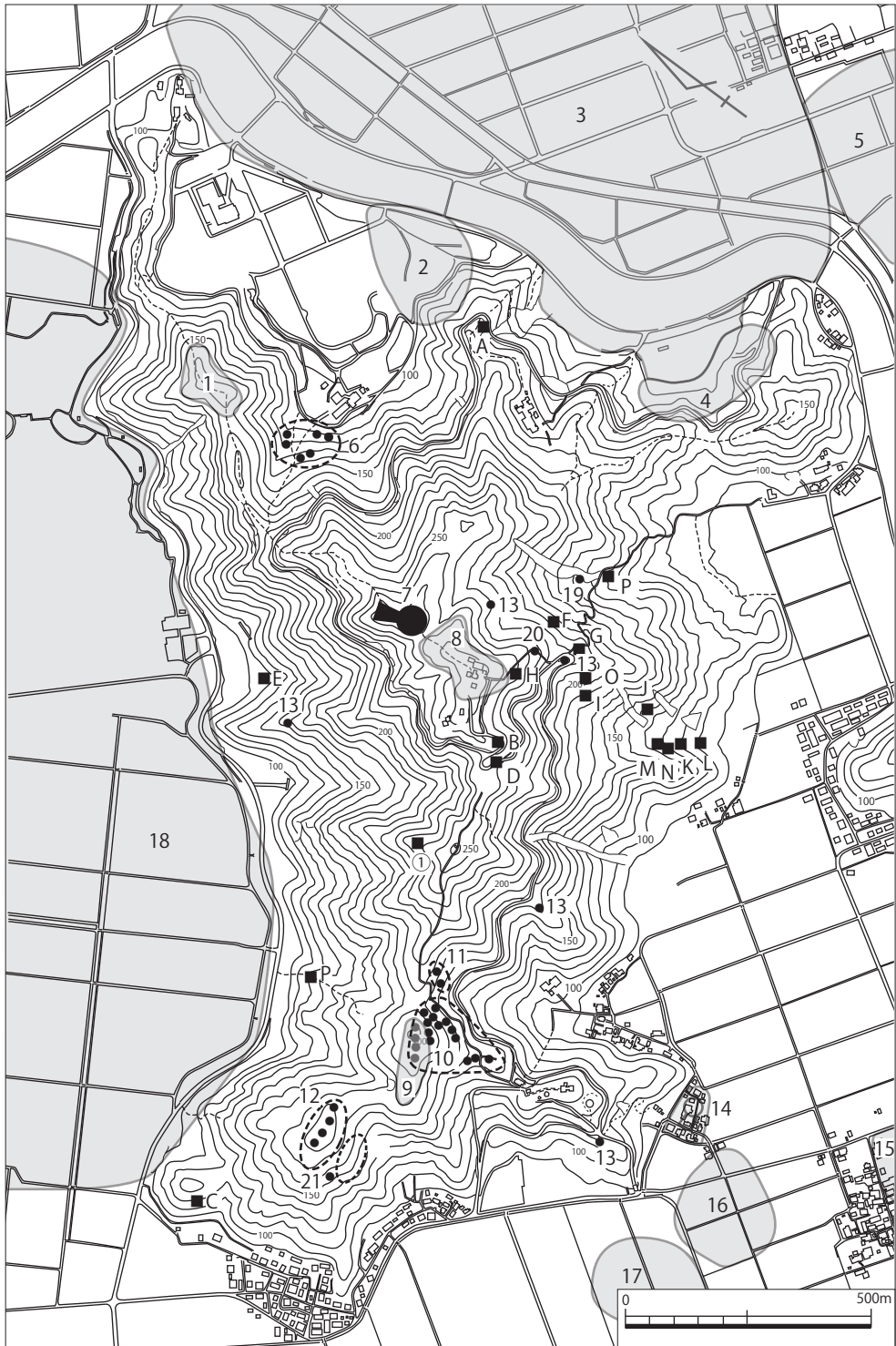
### (1)調査の目的など

石流南支群は、尾根に立地する石流支群より南東方向に下った場所に位置する。急峻な斜面に立地しており、石流支群との間には墳丘らしき高まりはなく、別の支群であることから石流南支群とした。石流南支群の中で2号墳は2012年に荒神山古墳群内における横穴式石室の実測調査報告を行った際に、E号墳として紹介している。その中では、周辺に古墳が存在することを報告していたが、基数や他の横穴式石室の形態については不明であった(仲田・大西2012)。

なお、2号墳は天津北郊にみられる穹窿頂持ち送り式石室を採用しており、荒神山古墳群やその周辺地域でみられる畿内系の横穴式石室とは様相を異にする。穹窿頂持ち送り式石室は天津北郊を除くと、滋賀県内では群集墳において散在的に分布している(辻川ほか2008)。そのうち、天津市和邇に所在する春日山古墳群ではその地域で通有にみられる畿内系の石室と混在し、特に小型の横穴式石室において採用されている(京都教育大学考古学研究会1989)。一方、荒神山古墳群内の山王谷支群1号墳は、支群内では墳丘規模が大きく盟主墳的な位置づけとなる(彦根市史考古部会2004)。このように、穹窿頂持ち送り式石室は群集墳内において他の形態の横穴式石室と混在する形で築かれているが、その中での位置づけはそれぞれ異なる。このため、穹窿頂持ち送り式石室を持つ古墳の群集墳内でのあり方を検討することを目的として、石流南支群の地形測量および石室の実測を実施した。(仲田)

### (2)石流南支群の測量成果(図3)

測量調査の結果、10基の古墳が確認された。しかし、急峻な斜面であるため土砂の流出が著しく、墳丘はすべて不明瞭となっている。また、古墳の周囲をめぐる周溝は、6号墳の東側や8号墳の西側で確認されたのみであり、共有や切り合い関係は不明である。現状では、3号墳が最も大きく直径11mを測るが、それ以外は10m以下と小型である。また、横穴式石室についても玄室幅が1.5mを超える



1. 日夏城跡 2. 古屋敷遺跡 3. 妙楽寺遺跡 4. 南谷遺跡 5. 蛭目遺跡 6. 荒神山古墳群日夏山支群  
 7. 荒神山古墳 8. 奥山寺坊跡 9. 山脇古城山城跡 10. 荒神山古墳群山王谷支群 11. 荒神山古墳群本堂谷支群  
 12. 荒神山古墳群石流支群 13. 荒神山古墳群(彦根市史考古部会2004では散在する古墳状隆起とされている)  
 14. 塚村古墳 15. 平流城跡 16. 稲里遺跡 17. 屋中寺廃寺遺跡 18. 曾根沼遺跡  
 19. 荒神山古墳群C号墳 20. 荒神山古墳群D号墳 21. 荒神山古墳群石流南支群  
 ①. 荒神山古墳群B号墳 A. 荒神山古墳群A号墳(採石地A) B. 採石地B C. 採石地C  
 ※以下、アルファベットは採石地名を表す

図1 荒神山付近遺跡分布図(S=1/14000)

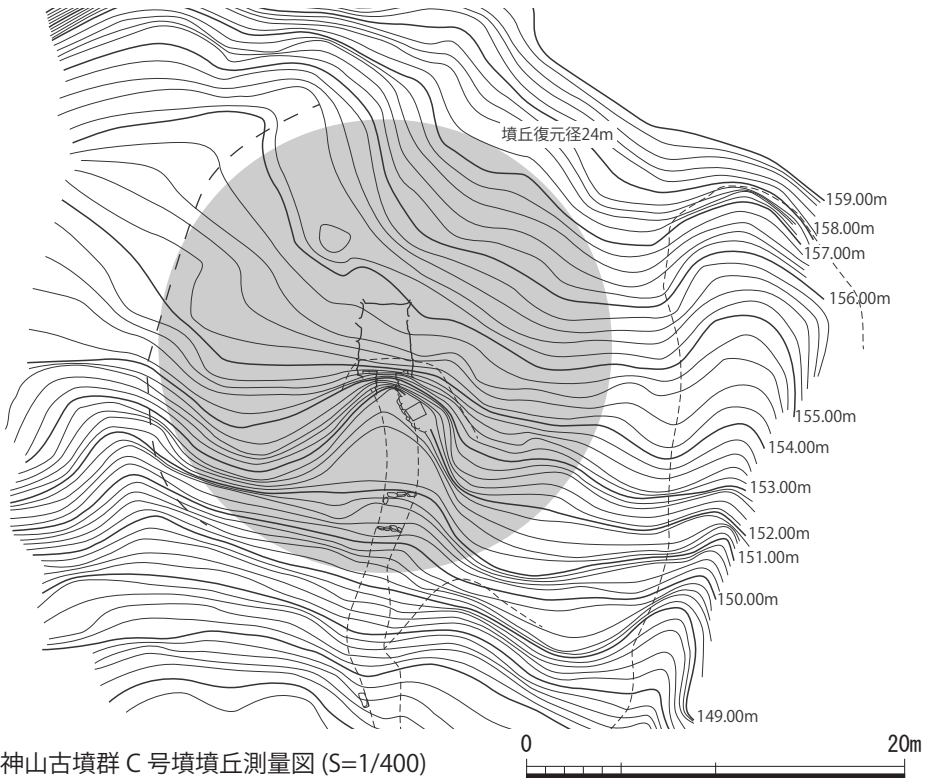


図2 荒神山古墳群C号墳墳丘測量図(S=1/400)

ものではなく、2号墳のように小規模な玄室を持つか、小型の無袖式石室を持つ古墳のみで構成されると思われる。全体的に古墳は小規模であり、盟主墳のように突出して大きい墳丘や石室を持つものはみられない。

10基の古墳のうち1、2号墳は支群内においてやや離れた場所に立地している。1号墳は土砂の流入により石室内部の様子は不明であるが、穹窿頂持ち送り式石室である2号墳と同様に玄室は穹窿状で、玄室天井石は1石である。このため、1号墳も2号墳と同じ石室形態を採用していると考えられる。これに対して6号墳は後述するように持ち送りは緩く、天井は3石以上が水平に架けられたとみられ、石室形態が異なる。他の石室は崩落や石材の抜き取りにより内部の様相が不明であるが、石室形態によって立地に差が生じている可能性が考えられる。(仲田)

石流南2号墳(図4)

1号墳と3号墳の中間に位置する古墳で、土砂の流出により石室が露出する。現状では径8m程度の円墳となる。横穴式石室は、羨道部が埋没しているが、それ以外は良好に残存する。

石室の主軸は磁北より30°西に振り、南東に開口する。玄室横断面は三角形に近く、奥壁・側壁・前壁ともに持ち送りが顕著であり、天井石は1石で構成される。現状では、全長3.8m、玄室長2.5m、玄室幅1.2～1.3m、玄室高1.6m、羨道長1.3m、羨道幅0.9mを測る右片袖式石室である。

玄室の左側壁では4段、右側壁では5段が確認され、前壁と同一の高さでは、小型の石材が使用される。奥壁は5段で1段につき1～2石で構成され、前壁は2段で1段につき1石で構成される。奥壁・前壁ともに側壁を架け渡す技法は見られず、隅角は上部まで保たれている。袖部は1辺50cm程度の石材1石のみで、下部は埋没する。(仲田)

石流南5号墳(図5)

石流南支群のほぼ中央に位置し、4、6号墳とほぼ同じ標高で並ぶ。径8m程度の円墳とみられ、石材の抜き取りにより石室部分が窪みとなっている。なお、周溝は土砂の流出により確認できない。現状では奥壁が1石、左右側壁はそれぞれ2石が残存する。横穴式石室は磁北より10°東に振り、南方向に開口する。現状では全長1.8m、玄室幅0.9mを測る。奥壁、左右側壁ともに1段分のみ残存する。左右

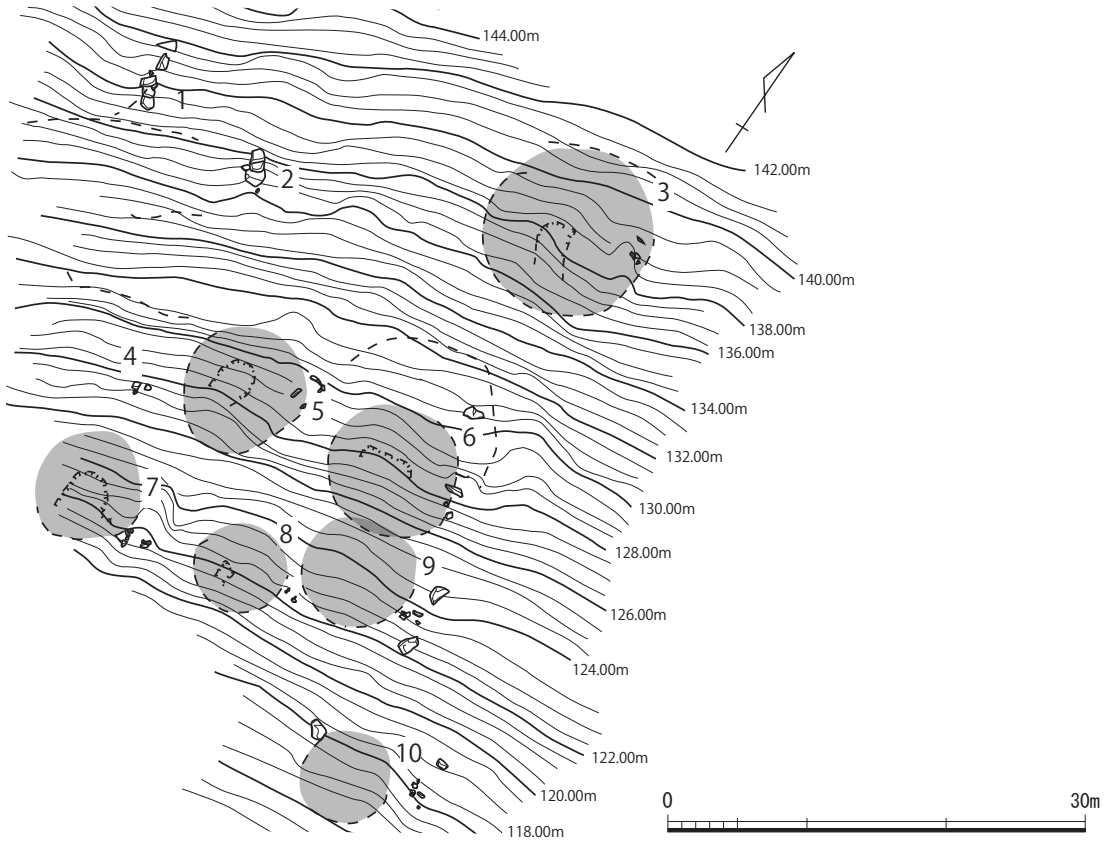


図 3 荒神山古墳群石流南支群墳丘測量図 (S=1/500)

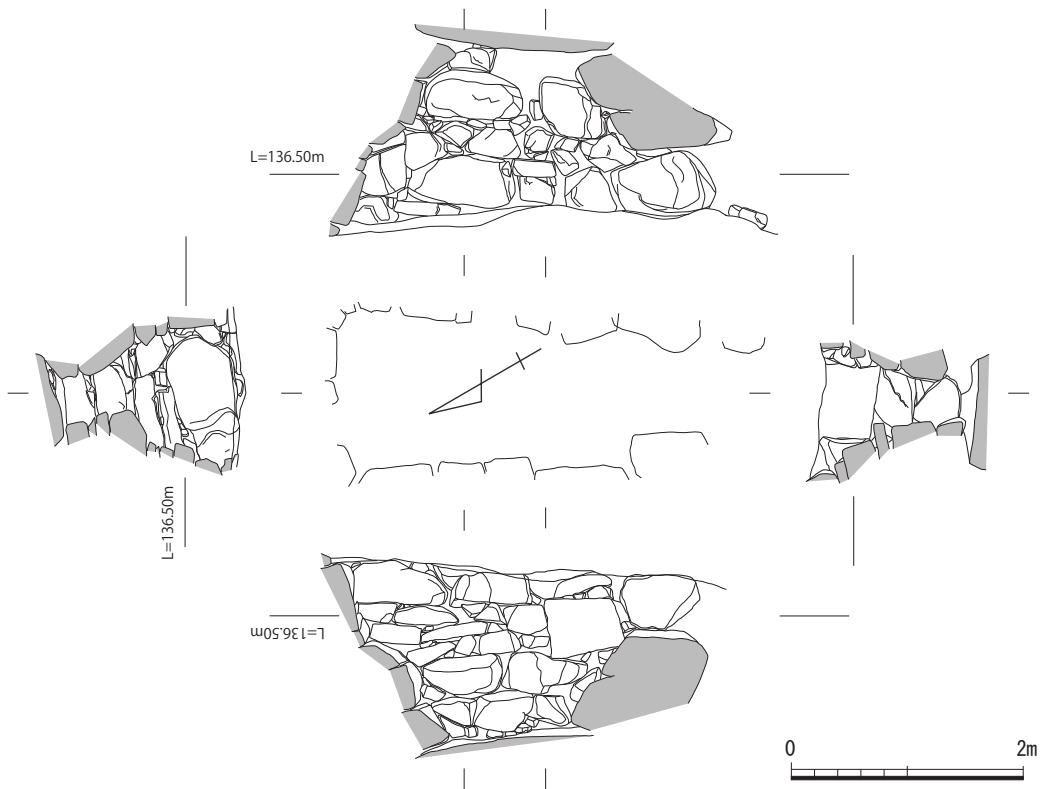


図 4 荒神山古墳群石流南支群 2 号墳石室実測図 (S=1/60)



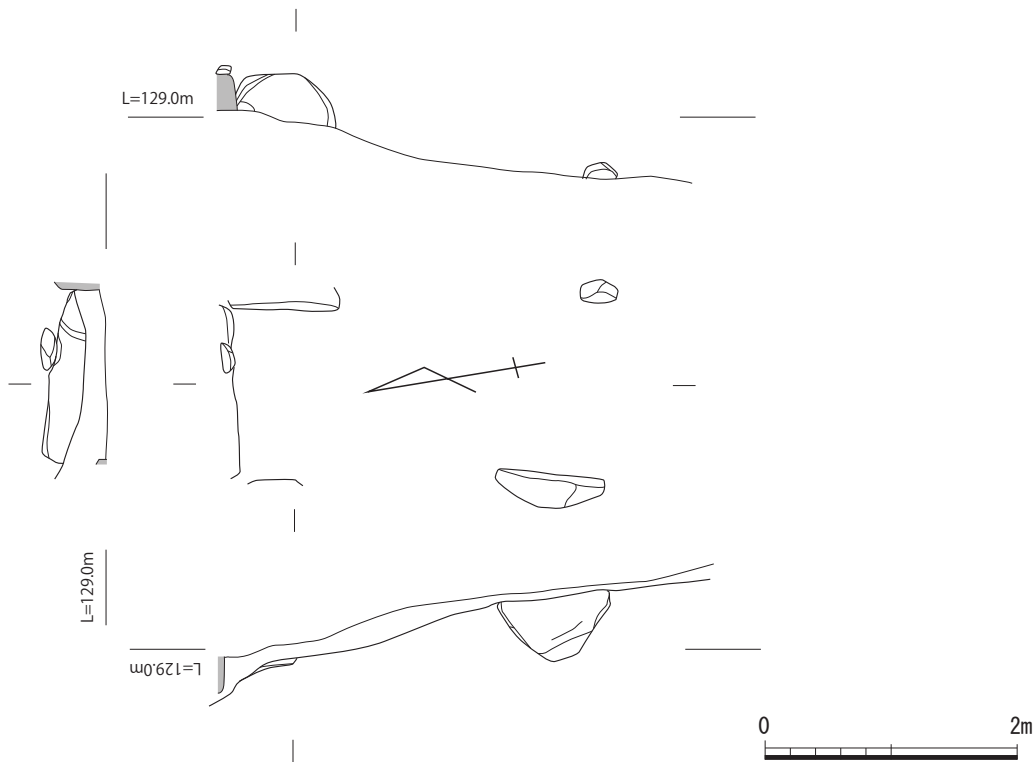


図5 荒神山古墳群石流南支群5号墳石室実測図 (S=1/60)

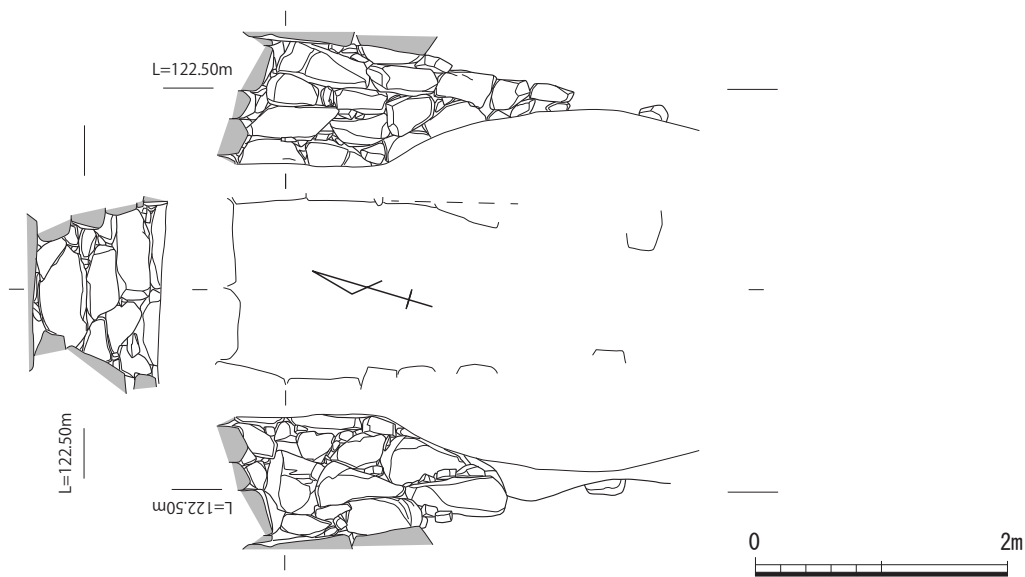


図6 荒神山古墳群石流南支群8号墳石室実測図 (S=1/60)

表1 荒神山古墳群 石流南支群 古墳一覧表

番号	墳形	墳丘規模 (m)	内部構造	開口方向	規模		袖形態	備考
					玄室 (m)	羨道 (m)		
1	円	10	横穴式石室	南東	—	—	—	天井形態が2号墳と類似。穹窿頂持ち送り式石室か？
2	円	8	横穴式石室	南西	長さ2.5×幅1.3	長さ1.3～幅0.9	右片袖	穹窿頂持ち送り式石室。
3	円	11	横穴式石室	南南東	—	—	—	
4	—	—	横穴式石室	南	—	—	—	右側側壁とみられる石材のみ残存。
5	円	8	横穴式石室	南	長さ1.8～×幅0.9	—	無袖	
6	円	10	横穴式石室	—	—	—	—	石材散乱。
7	円	9	横穴式石室	南	—	—	—	開口部付近の石材残存。幅1m。
8	円	8	横穴式石室	南南東	長さ3.5～×幅1.4	—	不明	天井石2石残存。3石以上が水平に架けられる可能性。
9	円	8	横穴式石室	南南東	—	—	—	開口部付近の石材残存。幅1m。
10	円	7	横穴式石室	—	—	—	—	石材散乱。

側壁は1辺50cm程度であるのに対し、奥壁は1段1石で構成される。このため、奥壁の石材は比較的大型である。石室規模は不明であるが、幅が狭くなおかつ墳丘も小規模なため、小型の無袖式石室と考えられる。(仲田)

石流南8号墳(図6)

石流南支群の南側で7, 9号墳と同じ標高で並ぶ。径8m程度の円墳で、西側には幅2mの周溝が確認される。

石室の主軸は磁北より15°東に振り、南南西に開口する。開口部付近は天井石が抜き取られたことで土砂が堆積し、左右側壁は一部崩落しているが、北側の奥壁と奥壁付近の左右側壁は良好に残存する。現状では全長3m、幅1.4mを測る。南側では幅が狭くなるが、石材抜き取りの影響によるものである。なお、袖の有無は不明である。

側壁、奥壁ともに5段程度が確認される。持ち送りはやや強く、石室の横断面は台形状を呈する。一辺70cm程度の石材が使用されており、中には正方形に近いものもみられる。天井石は2石が確認され、側壁の状況から3石以上が水平に架けられているものとみられる。

天井石が1石で強い持ち送りを持つ2号墳とは大きく異なり、荒神山古墳群やその周辺地域で採用されている畿内系の横穴式石室である可能性が高い。(仲田)

(3)石流南支群の測量調査まとめ

以上のように、今回の調査では石流南支群全体の測量や横穴式石室の実測を行った。その結果、石流

南支群は急峻な斜面上に位置し、計10基で構成されることが判明した。そして、墳丘・石室ともに小型であり盟主墳的な古墳は確認できなかった。このような状況は、2014年に報告したG地区1～4号墳と類似している(大西・中川ほか2014)。石流南支群が造営された年代は、古墳の小型化が進んでいることから7世紀前半以降であると考えられる。

また、横穴式石室は2号墳が穹窿頂持ち送り式石室であるのに対し、6号墳は畿内系の石室とみられ、一つの支群内において異なる型式の横穴式石室を採用していることが明らかとなった。(仲田)

4. 石切場の実測調査

(1)調査位置および調査の方法

今年度までに実施した分布調査によって、矢穴を有する石材は16地点で確認している。このうち採石地A～Cについては報告を行ったが(仲田・大西2012、榎木・大西2013)、今回は荒神山南東部の谷斜面に位置する採石地J・K・Lの調査成果を報告する。この谷斜面には、山上から山裾にかけて矢穴が残る石材が点在しており、当該谷一帯で採石活動が行われていたと想定される地区である。

今回の調査では、各石材に任意で基準線を設定し、S=1/20の縮尺の平面図・立面図を作成した。また、矢穴についてはS=1/2あるいはS=1/1の縮尺で、平面、縦・横断面形状の実測を行った。ただし、矢穴の残存状況等により、平面・横断面形状の実測を行っていない場合もある。なお、図中の方位は磁北を示している。

矢穴に関する用語については、森岡秀人・藤川祐作両氏(森岡・藤川2008)の研究成果を参考とし、

矢穴の計測方法については市川浩文氏(市川2010)の研究成果に依拠している。また、各採石地の矢穴の法量については、表2にまとめているので、あわせて参照されたい。

## (2)採石地の調査成果

### ①採石地 J(図8)

谷斜面のおよそ中腹である標高140m付近に位置する。現地の状況から流紋岩凝灰岩(湖東流紋岩)の露頭石と考えられ、半分が土砂により埋没しているが、割裁後、端石材として残存している。埋没部分の状況は不明であるが、現状で矢穴は6個確認できる。矢口長は8.0cm~10cm、矢口の平面形は全て隅丸長方形を呈する。矢底長Aは3.7~7.4cmの大きさで、底部を平らに整える意識がみられる。矢穴深度は4.4cm~7.5cmの間におさまる。内部は比較的丁寧に仕上げられ、矢底から内壁への屈曲点も認識できる。

### ②採石地 K(図8・9)

採石地Jよりさらに斜面を下った平坦地の端部に所在する流紋岩凝灰岩の露頭石である。同一直線上に位置する矢穴列と矢穴列痕が確認できる。矢穴列痕(No.4~No.9)は上部に6個残り、矢口長は7.6~9.6cmの間におさまる。矢底長Aは、4.1~4.8cm、矢穴深度は3.0~5.0cmをはかる。縦断面形は逆台形であり、底部は平坦に調整され、矢底から内壁への屈曲点は明瞭である。

矢穴列については、3個の矢穴痕(No.1~No.3)が残る。矢穴口は8.1~9.5cm、平面形は隅丸長方形である。各法量は、矢底長Aは4.3~4.7cm、矢底幅Aは1.0~1.4cm、矢穴深度は4.3~4.4cmと近似している。縦断面形は、矢底から内壁への境が不明瞭で、横断面は矢底が丸く尖った緩いV字形を呈する。矢穴列痕と比較すると、矢穴の内部は粗い調整であり、形状にも差が認められるため、割裁の時期や工人が異なる可能性がある。

### ③採石地 L(図9)

採石地Kと近接した場所で、同じく平坦地の端部に所在する流紋岩凝灰岩の露頭石である。矢穴列が1列確認され、矢穴は3個認められる。平面形は隅丸長方形を呈するが、矢口長は5.9cm、7.8cm、9.4cmと個体差がある。矢穴の深度は3.4~4.2cm、

矢底長Aは3.5~3.9cm、矢底幅Aは0.7~1.0cmとほぼ同じ大きさである。縦断面は矢底から内壁への屈曲点は不明瞭である。横断面は矢底が丸く尖った緩いV字形(No.1)を呈する。矢穴自体は全体的に粗い調整で、No.3の矢穴を掘り損なったことから、割裁されることなく放棄されたと考えられる。

### (3)まとめ

以上、3地点の採石地を報告した。今回の調査によって、矢穴の平面形は隅丸長方形、縦断面形は矢底から内壁への屈曲点が丸みを帯びた逆台形ないしは明確な逆台形、横断面形は矢底が丸く尖った緩いV字形の個体が存在することが判明した。

また、報告した矢穴の法量の分布をまとめたのが図10である。この図からは、矢口長8.0cm~10cm前後、矢穴深度が4.0cm~6.0cm前後の資料が多いことがわかり、この法量を持つ矢穴が今回調査を行った地区内では標準である可能性がある。

ところで、今回調査を行った地区は、宇曾川を利用しやすい位置にあり、切り出した石材を、河川を介して運搬するには適している。この荒神山の石材は以前の報告(樫木・大西2013)でも記述したが、彦根城に供給された可能性が高い。しかし、前回よりさらに分布調査を進めた現状でも、荒神山において矢穴を持つ石材は少なく、彦根城の石垣の矢穴をもつ石材の数を鑑みれば、産出地と供給地の齟齬は、依然課題として残されたままである。

このことについては、以前の繰り返しになるが、まず、流紋岩凝灰岩の産出地は周囲にもいくつか存在するため、石材の一調達地という可能性に留意すべきであろう。また、今回は地図に反映できていないが、荒神山には矢穴を持たない割石が集中する地点もいくつか存在する。推測の域はでないが、割りやすい石材ならば、矢穴を掘らずに採石するほうが効率的であるため、矢穴の数が少ないという点は石材の硬度に起因する可能性も考えていく必要があるだろう。

今後については、未調査の採石地があるため、まずは着実に実測調査を終了した後、荒神山内における矢穴の型式分類を行い、石が切り出された時期等、採石活動の一端を明らかにしたい。

(樫木・西澤)

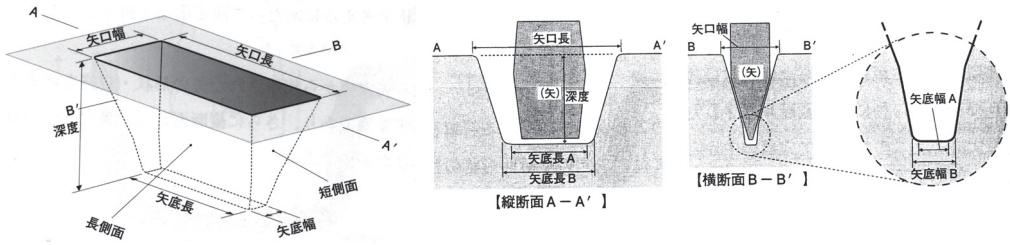


図7 矢穴計測部(市川2010)

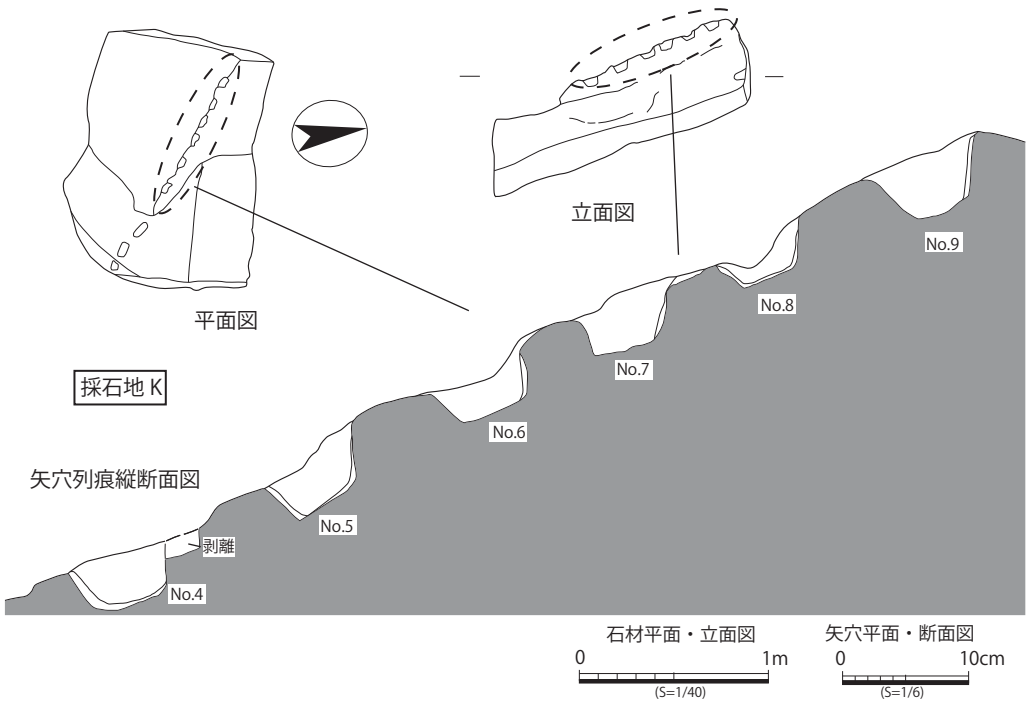
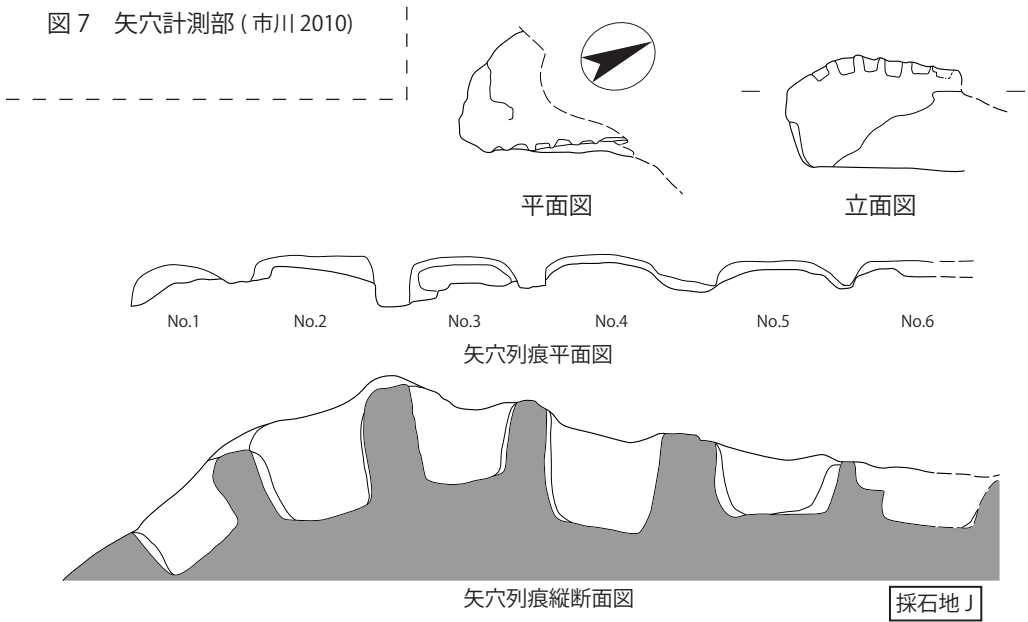


図8 採石地J・K 石材平面・立面図(S=1/40)ならびに矢穴平面・断面図(S=1/6)



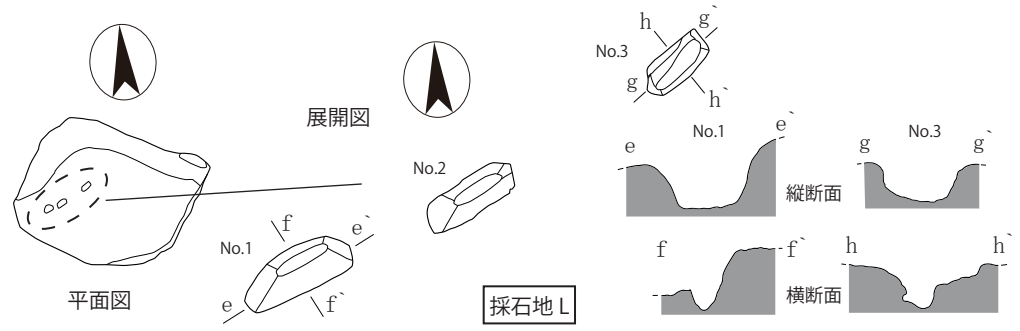
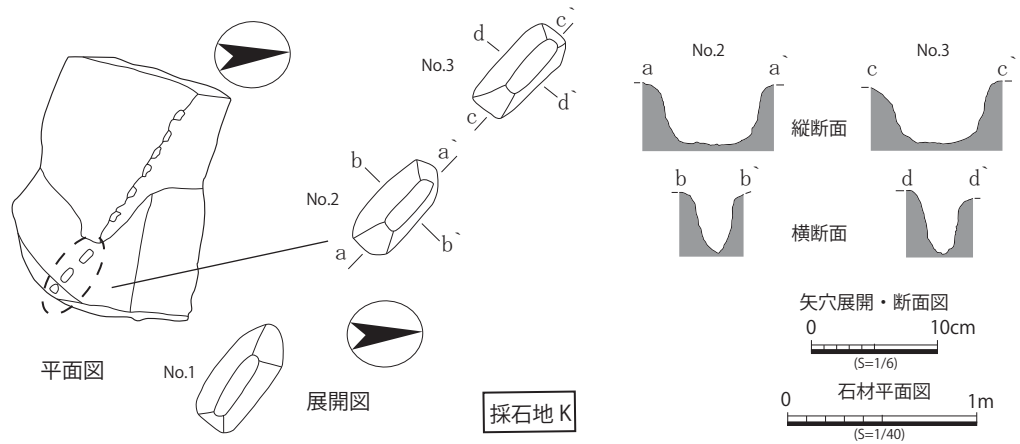


図9 採石地K・L 石材平面図 (S=1/40) ならびに矢穴展開・断面図 (S=1/6)

表2 矢穴法量表

採石地J

番号	矢口			矢底				深度	断面形	
	矢口長	矢口幅	平面形	矢底長A	矢底長B	矢底幅A	矢底幅B		縦断面	横断面
J-1	8.0	—	隅丸長方形	5.8	6.4	—	—	5.4	逆台形	—
J-2	9.5	—	隅丸長方形	3.7	7.2	—	—	7.4	逆台形	—
J-3	9.0	—	隅丸長方形	4.0	6.5	—	—	7.2	逆台形	—
J-4	10.0	—	隅丸長方形	6.5	—	—	—	7.5	逆台形	—
J-5	9.8	—	隅丸長方形	7.4	—	—	—	4.8	逆台形	—
J-6	8.8	—	隅丸長方形	6.8	7.2	—	—	4.4	逆台形	—

採石地K

番号	矢口			矢底				深度	断面形	
	矢口長	矢口幅	平面形	矢底長A	矢底長B	矢底幅A	矢底幅B		縦断面	横断面
K-1	9.5	4.2	隅丸長方形	4.5	5.6	1.2	1.8	4.4	逆台形(丸底)	緩いV字形
K-2	8.1	3.9	隅丸長方形	4.7	6.1	1.0	1.8	4.3	逆台形(丸底)	緩いV字形
K-3	8.4	3.5	隅丸長方形	4.3	5.9	1.4	1.8	4.4	逆台形(丸底)	緩いV字形
K-4	8.2	—	—	4.6	5.8	—	—	5.0	逆台形	—
K-5	8.2	—	—	4.2	5.6	—	—	3.5	逆台形	—
K-6	7.8	—	—	4.1	5.6	—	—	4.4	逆台形	—
K-7	9.2	—	—	4.8	—	—	—	3.5	逆台形	—
K-8	7.6	—	—	4.1	4.8	—	—	3.0	逆台形	—
K-9	9.6	—	—	4.4	—	—	—	4.9	逆台形	—

採石地L

番号	矢口			矢底				深度	断面形	
	矢口長	矢口幅	平面形	矢底長A	矢底長B	矢底幅A	矢底幅B		縦断面	横断面
L-1	9.4	3.7	隅丸長方形	3.9	5.0	1.0	1.5	4.2	逆台形(丸底)	緩いV字形
L-2	7.8	2.8	隅丸長方形	3.5	5.4	0.7	1.0	4.0	逆台形(丸底)	緩いV字形
L-3	5.9	2.8	隅丸長方形	3.6	5.1	0.8	1.1	3.4	逆台形(丸底)	緩いV字形

(単位: cm)

※ — は残存の状況等により計測不可

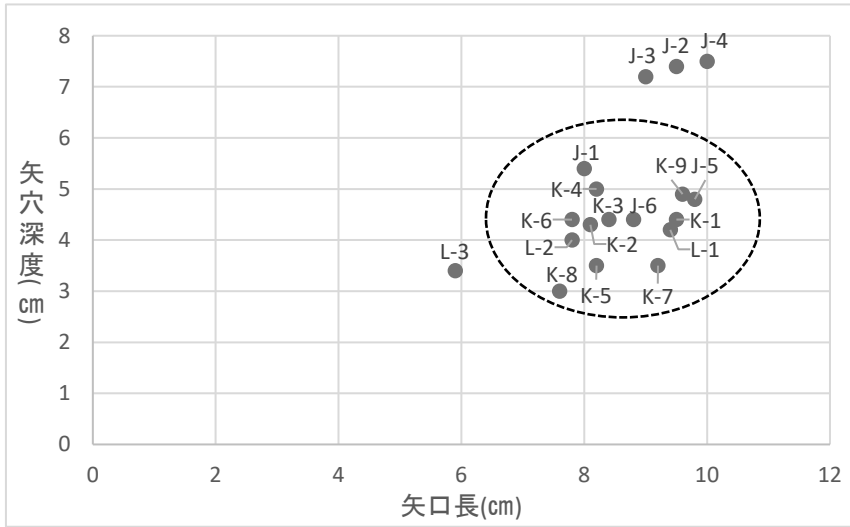


図10 採石地J・K・L矢穴法量分布図

## 5. おわりに

荒神山に所在する群集墳のうち、今回はC号墳と石流南支群について墳丘測量調査を実施した。併せて荒神山石切場内の採石地J・K・Lの3地点について石材の実測調査を行った。

C号墳については地形測量調査により土の流失・土地改変の影響を大きく受けていた現状を記録することができ、墳丘規模の復元案を提示したほか、石流南支群についても、一つの支群内において異なる型式の横穴式石室を採用していることが明らかとなり、石室形態と立地の違いの関係性など新たな検討要素を抽出することができた成果は大きい。

石切場の調査においても、矢穴の平面形・法量などの差異を見出し、今後型式分類を行う上での基礎データを得ることができた。

今回報告した古墳・石切場をはじめとし、荒神山全域にはまだ多くの未調査・未報告の遺跡が点在している。今後はこれらの調査を実施したい。(岡山)

## 謝辞

今回調査を実施するにあたり、円滑な調査の進行へのご指導・ご協力をいただきました。末筆ながら記して深謝申し上げます。

荒神山神社、定森秀夫先生、中井均先生

## 【調査期間・調査参加者】

※所属は調査当時のもの

〔C号墳墳丘測量調査〕

調査期間：2016年3月27日～2016年月4月9日

調査参加者

- 伊田匠(人間文化学部3回生)
- 遠藤あゆむ(人間文化学部1回生)
- 杉山佳奈(人間文化学部4回生)
- 岡山仁美(人間文化学部卒業生)
- 樫木規秀(草津市教育委員会)
- 仲田周平(豊岡市教育委員会)
- 西澤光希(人間文化学部4回生)
- 福井知樹(人間文化学部2回生)
- 守武弘太郎(人間文化学部2回生)

墳丘測量図トレース

- 岡山仁美(人間文化学部卒業生)

〔石流支群測量・実測調査〕

調査期間：2016年3月20日～2016年4月26日

調査参加者

- 伊田匠(人間文化学部3回生)
- 伊藤航貴(人間文化学部4回生)
- 樫木規秀(草津市教育委員会)
- 鈴木香織(放送大学教養学部4回生)
- 仲田周平(豊岡市教育委員会)
- 西澤光希(人間文化学部4回生)

測量図・実測図トレース

- 仲田周平(豊岡市教育委員会)

〔採石地 J・K・L〕

調査期間：2014年2月9日～11日、2016年4月23日  
調査参加者

伊田匠（人間文化学部3年生）  
岡山仁美（人間文化学部卒業生）  
榎木規秀（草津市教育委員会）

実測図トレース

伊藤航貴（人間文化学部4年生）  
岡山仁美（人間文化学部卒業生）  
（以上、五十音順・敬称略）

### 【参考文献】

- 市川浩文 2010「近世城郭石垣における石割り技術—肥前名護屋城跡の矢穴調査—」『先史学・考古学論究』V 下巻 龍田考古学会
- 大西遼・中川永・仲田周平・岡山仁美・莊林純・馬場将史・伊藤航貴 2014「彦根市・荒神山をめぐる考古学的調査—後期古墳と延寿寺所蔵遺物の調査—」『人間文化』第37号 滋賀県立大学人間文化学部
- 榎木規秀・大西遼 2013「彦根市荒神山における考古学的調査—後期古墳と採石地の調査—」『人間文化』第34号 滋賀県立大学人間文化学部
- 京都教育大学考古学研究会 1989「大津市真野春日山古墳群石室実測調査報告」『史想』第22号
- 先山徹 2010「彦根城石垣の岩石記載と石材産地」『特別史跡彦根城跡 石垣総合調査報告書』彦根市教育委員会
- 辻川哲朗・守田めぐみ・藤村翔・山元温司・花田勝広 2008「近江の横穴式石室」『近畿の横穴式石室』横穴式石室研究会
- 仲田周平・大西遼 2012「彦根市・荒神山古墳群横穴式石室の基礎的研究」『人間文化』第32号 滋賀県立大学人間文化学部
- 彦根市史考古部会 2004『『新修彦根市史』編纂に伴う彦根市内遺跡・遺物調査報告書』彦根市教育委員会
- 森岡秀人・藤川祐作 2008「矢穴の型式学」『古代学研究』第180号 古代学研究会
- 渡辺恒一 2003『荒神山と周辺地域の歴史と展示図録』彦根城博物館

## Comment

定 森 秀 夫

人間文化学部地域文化学科教授

滋賀県立大学考古学研究室では、荒神山に所在する古墳の測量調査などを2011年から開始し、これまでに『人間文化』第32・34・36・37号にその成果を発表してきた。この荒神山調査は、断続的ではあるが、大学院生を中心に学部生や卒業生が協力して継続してきた。今回は、古墳ではC号墳と石流南支群の測量・実測調査の報告、採石地では3地点の矢穴の実測調査の報告である。

大型横穴式石室であるC号墳の墳丘測量調査に関しては、現状では直径約24mの円墳の可能性を指摘している。墳丘の残存状態が悪い中、20cmの等高線の測量図を作成し検討した結果の数値である。このC号墳の荒神山群集墳の中での位置づけは今後の課題であろうが、墳丘規模の推定と横穴式石室実測による規模の大きさから、湖東における位置づけも自ずと浮き上がってくるだろう。

石流南支群の調査では、急峻な斜面に築造されていること、渡来系と畿内系の横穴式石室の両者が見られることなど、荒神山群集墳の性格を検討する際の基礎的データを提供した測量・実測調査といえよう。

採石地3地点の矢穴の実測調査から、矢穴法量の検討を行い、彦根城への石材の供給の問題にも踏み込み始めている。このような問題意識は、実際に現地に行き、自ら実測調査を行い、報告するための整理過程で芽生えてくるものである。彦根城を新視点から見えていく道筋が見えてきたようにも思える。

測量・実測調査で荒神山所在遺跡の実態が少しずつではあるが明らかになりつつあるのではないだろうか。今後も、考古学研究室の院生・学生が積極的に荒神山の考古学的調査を継続していくことを切に願うのみである。